

## 第1章 秋田駅周辺で今何が起きているのか？

僕は秋田駅周辺を獅子舞の視点で歩こうと思った。秋田県は人口減少とそれに伴う民俗芸能の減少が進行しており、それに伴って秋田駅周辺ではコンパクトシティ化が広がりつつある。経済優先であり個人主義的な考え方が広がっていく一方で、地域の交流機会が減り安心安全で寛容な町のあり方を再考する時が来ている。これについて考える上で、獅子舞という生き物を町に放してみたら、どのようなリアクションが返ってくるだろうか。そのようなことについて考えていきたい。

秋田県には、町や地域単位で数多くの民俗芸能が伝承されており、それらは地域の誇りや住民同士の交流など、様々な効用をもたらしており、地域の関係人口創出やUターンの動機などに結びつくこともある。平成5年の秋田県教育委員会が実施した「秋田県民俗芸能緊急調査」によれば、県内で315件の民俗芸能が把握されたが、平成22~24年の熊谷嘉隆氏の「秋田県の民俗芸能：現状と課題そして今後について」という論文によれば、275件にまで減少していることが確認された。19年間で38件のペースで県内から民俗芸能が消滅しているのだ。この原因として、後継者不足や資金不足、関心層の縮小などが考えられる。

また、2014年5月に民間の研究機関である「日本創成会議」は2040年までに日本全国1741市区町村のうち896市区町村に消滅する可能性があるという結果を発表した。これらの市区町村は「消滅可能性都市」と呼ばれ、「2040年までに20歳から39歳の女性の数が2010年と比べて半減する」と推測される自治体を数えた指標である。日本全国で最も消滅可能性都市に選ばれた自治体が多い都道府県が秋田県で、その割合が96%に上ることがわかった。しかも、その結果は、大潟村以外の24個の自治体全てが該当するという結果になってしまったのだ。

民俗芸能を伝承する若い世代がいなくなっているのは、このデータを見ると納得できるだろう。秋田県は今、人口減少と同時多発的に、民俗芸能の減少という危機に直面している。また、この消滅可能性都市が示すのは、人口の問題だけではない。むしろ税収が乏しくなって、自治体の経営が破綻するという意味での消滅を示唆している。財政が潤えば潤うほど祭りも豪華に賑やかに実施することができる。仕事があり活気がある街には人が集まる。そういう意味では、どのように財政を潤わせることができるかということも大事なポイントだ。獅子舞をはじめ民俗芸能が実施できるということはある意味、財政的な豊かさや精神的な豊かさなどをベースとしているとも言えるし、これらの豊かさを逆に呼び込むような存在でもとも言えるのだ。

秋田駅周辺では、2022年6月開館予定の「秋田芸術劇場」と2024年秋完成予定の270戸の民間の集合住宅、2022年完成予定の地上14階建ての分譲マンションの建設など、秋田の中心市街地の再開発が急速に進行しつつある。この背景にあるのは人口減少と少子高齢化の深刻化であり、まちづくりのコンパクト化が求められているのだ。これらの新築需要の呼び水となったのが、秋田版CCRC（生涯活躍のまち）の拠点施設「クロッセ秋田」が2020年10月に完成し、想定外に早く完売したということ。そこから一気に、秋田駅周辺の中心市街地の再開発が進んだ（参考：2021年9月13日, 日本経済新聞, <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCC282QW0Y1A820C2000000/>）。この結果、今後の秋田市中心市街地の街並みは高層ビルが増え、「地上に玄関のない家」が急増するだろう。その結果、地域の助け合いは薄れ、個人間の趣味や友人関係を優先するようなライフスタイルが促進され、観光客にとって見所のない街並みに変貌すると考えられる。獅子舞が生息しにくい町になりつつあることは否めない。この町で獅子舞はどの程度生息できるのか？生息する可能性があるとするれば、その最適ルートはどのような形なのか？等を本ガイドブックによって明らかにする。